

池田行彦氏（元大平蔵相秘書官）に聞く

身近に接した哲人政治家

―聞き手・阿部 穆



日中友好の維持、日中文化交流協定などのため訪中した大平外相に随行した池田行彦代議士とホテルの一室でくつろぐ（1979年12月5～9日）

私の結婚式での忘れられないエピソード

——池田さんが直接、大平さんと関わりをもたれたのは、昭和四九年（一九七四年）七月、大平大蔵大臣の秘書官になられた時だったですね。その前に、面識があったのですか。

池田 私が池田紀子と結婚してからのご縁です。それまでは、もちろん大蔵省の大先輩であるということは存じ上げておるし、それから女婿の森田一さんは（大蔵省）官房文書課の四年先輩ですからね。そういうことで間接には知っていましたけれども、直接にお話するようになったのは結婚を契機にですね。

——そうすると、秘書官になられる前に、池田さんのお婿さんということで、個人的にもいろいろ話される機会があったのですね。その頃に何か印象に残っていることはありませんか。

池田 私どもの結婚式で忘れられない思い出があります。昭和四四年の五月一日、ホテルオークラの平安の間で桜田武さんご夫妻の媒酌で、主賓のご挨拶は新婦側は佐藤（栄作）総理、新郎側は賀屋興宣先生にやっていたいただきましたが、賀屋先生に決まるまでには次のような経緯があったのですね。私はニューヨーク駐在の頃、IMF総会その他で毎年、お見えになる福田（赳夫）大蔵大臣の現地での使い走りをして存じ上げていたので、福田大臣にお願したところ、「俺はちょっと遠慮したい」という返事を越智通雄秘書官からいただきました。それではと広大付属の先輩である村上孝太郎事務次官にというような話をしていたところ、政治家がたくさんお出でになるのに、それではバランスがとれないよ、ということ、やっぱり大蔵大臣の福田さんと同格として、大平さんがやってやるよ

なことを言つて下さつただけでも、結局、そうはならないで最終的には広島出身の賀屋先生になつたのです。

それで忘れられないのは、大平さんが主賓のテーブルの配置を見て、当然、メインの人物であつた福田大蔵大臣の席を「この人はいいよ」と言つて、他のテーブルへ移してしまつたのです。いや、これには驚きましたよ。

——その頃から、大福関係というのはあまり良くなかつたのですね。

池田 そうです。その時は、むしろまだ「池田に反発した福田」という目で言われたのかも知れませんが、せんでも、大平さんも……。だから私は、政治の世界というのは厳しいものだなという感じを、初めて受けましたね。

——それで、大平さんの挨拶はなかつたわけですね。

池田 よく憶えていないな。最後に親代わりの挨拶は前尾（繁三郎）先生がして下さいました。前尾先生は当時、宏池会の会長で、交替の直前でしたから。大平先生から実質的にいろいろなご心配を頂戴したわけですが……。

——それは、やっぱり信濃町のお母さん（満枝夫人）と相談されて、やられたわけですね。

池田 そういうことです。「これは外せ」とおっしゃつたんですから、相当なものです。そんなことで、話がパツと飛んじやうけど、同じように大平さんという人も、キツイ時はキツイなど思つたのは、一番、末期ね。大平内閣不信任案が通つた時ね、選挙になる前に、何かの話で私が「灘尾弘吉さんは、こうおっしゃっております」ということを、大平総理にお伝えしたら、「灘尾、あんな者は政

実 政治家じゃない」と言い切ったのです。灘尾衆議院議長の内閣不信任案の対処に強い不満があったのでしょうが。そんなことで、私はいちばん最初のスタートといちばん最後の時に、政治家・大平さんの非常に強いところを見ましたね。

去 — なるほど、秘書官時代の話に戻してください。

秘書官時代の 大平蔵相の哲学的な答弁

池田 秘書官になるまでの過程では、いろいろあつたんですよ。私も大蔵省で国際金融局から主計局に移りましたけれども、当時、政界へ転身したらどうかという話が、特に池田家の周辺から出ていました。そんなプロセスの中で、昭和四七年の参議院（議員）の選挙のときかな、チフツと、「どうだ」という話が 大平幹事長からあつたのです。これは、すぐ立ち消えになりましたけれども……。その辺で、いろいろ役所のほうなんかに関こえたりして、「何だ、いろいろな部署で大蔵省の仕事が続けるつもりなのに」とむくれたことがありますけれどもね。そんなことがあつて、広島に国税局間税部長として四八年に赴任したんですよ。

— 池田総理が昔、就任されたポストですな。

池田 ウチの親父は、熊本の国税局の間税・直税（部長）をやつたのが、それから東京の財務局長ですけどね。

そして、第一次オイルショックの時ですよ、その時代に地元からいろんな話があつて、それから

間もなく政界に転出することになるんだけれども。年が明けた四九年頃に、「もうそれじゃ出るか」ということで、役所を退官する決意を固めて（大平さんに）話をしたわけです。そうしたら、大平さんはやはり「それは具合が悪い、もうちょっと待てないか」という話なんです。具体的には当時、中選挙区で広島三区でしたけれども、増岡博之先生が宏池会から出ておられましたからね。「もう少し待てんか」という話があったけれども、私は「いや、この機会に出馬させて下さい」とお願いしました。そうしたら、七月に福田さんが大蔵大臣をお辞めになったので、外務大臣から大平さんが横滑りして大蔵大臣になられた。私は、たまたまそのニュースを広島国税局で聞いていたのです。それで、「おやおや、どういうことになるのか」と思っていたら、あに図らんや「お前、秘書官になって、手伝え」という、お達しがきたんですわ。大平さんとしては、それで私を縛り付けるつもりだったんでしょう。私は「仕様がな、すぐ辞めるわけにはいかないな」と思いました。

それから、森田（一）首席秘書官で、事務のほうでは小粥（正巳）さんで、私は末席の鞆持ちをやらせていただいたんです。まあ、その秘書官時代には、私は政治のことには首を突っ込まなかったつもりです。これは自分でも事務屋に徹してやったつもりです。それでいろんなことがありましたけれども、その秘書官の時代に思い出があるといえ、皆さんがおっしゃることでしょうけれども、大平さんが大変な読書家であり、哲人宰相と言われるように勉強される方で、時間があると、「おい、ちょっと本屋へ行こう」というので、いろんな本屋へ行かれたことですね。いちばん大平さんの好まれたのは、神田の神保町にある岩波書店の本店じゃなかったかな。

——虎ノ門書房じゃないのですか。

実 池田 近間の時には虎ノ門書房で、少し時間があると「おい、ちょっと岩波まで行こうか」ということでした。本の配列なんかで好きだったのが、岩波だったような気がしますよ。

華 ——— そう言えば、瀬田のお宅でも、結構、岩波の本が多かったですね。

去 池田 そんなことがあるのと、演説だとか答弁なんというのでも、「アーウーの大平さん」と言われただけでも、文章にしてみるとキチンと脈絡も通り、見事な文章になったですね、アーウーを外すとね。そういった中で、記憶にあるのは、時々、(国会の)速記(者)から「大蔵大臣の答弁で、どうしてもこのところが分からないんですが」という問合わせがあったのです。その中の一つに、今でも鮮明に憶えているのは「カクリツ」という言葉があったのです、こういう文脈が覚えていないんですが。普通ならば何パーセントという意味での「確率」ですが、それでは通じないと言っわけですね。そこで、私はこれはカントの哲学なんかの「格率」だといい、それだとピシャッと意味が通じるんですよ。しかし、(国会の)答弁でそんなことを言ってもね、説明抜きじゃ分かんですよー。

——— それはね、例の国連の中国代表権の時なんかもね、「世界の国々から『祝福』されて」なんていう言葉は、国会に出てこない言葉ですよ。ああいう言葉が、ポコッと出てくるんですよ。

池田 ありますよね。そんなことがありましたですね。

——— それから、今のお話を伺って、「ハハア」と思ったのは、あの時、池田さんを秘書官にされたのは、「自分の側において将来、政治家になるために、政治家の秘書官としての経験を積んでもらって」というような気持ちがあったんじゃないかと思うのですが……。

池田 その通りです。長い目で見れば、そういった政治面の訓練をしてやろうという親心です。し

かし、短期的に言えば「俺のところに縛りつけて、しばらく政界進出を待たせよう」ということなんです。

——池田さんは、どついう気持ちでしたか。しょうがないと思つたのですか。

大平蔵相に辞表を受理されるまでの経緯

池田 それは、しょうがないと思つて、一年間、正確には一〇カ月余りですけれども、事務屋に徹して、私は仕事をしたつもりです。しかし、その結末の話をつづけて先に言つてしまうと、私が「大臣秘書官を辞めさせていただきたい」と申し上げたのは、四月二日じゃなかったかな。昭和五〇年度の予算が成立したのが、四月一日の夜だったか二日の朝だったかなんですよ。それが終わつてから、すぐに秘書課長の禿河徹映さんに「秘書官としても、まだいろいろ仕事があるのは承知しておりますけれども、ともかく予算という一番大きなものを通つた区切りでございますので、恐縮でございますが辞めさせていただきます」と言つたわけですよ。そしたら、もちろん大平大臣は、「駄目だ。もう少し勉強しろ。何とか断念できないか」といふんなやりとりがありましたね。「どうだ。それなら一つの妥協案として、一遍、地元へ帰つて、いろいろ様子を見てこないか」という話をされた。しかし、こちらも、いや、そういつたことをやっていたら、地元へ帰れば、いろいろな意見があるのは分かつている。だから、これは地元へ帰る以上は、不転の姿勢じゃなくてはいかん、というんで「いや、これで辞めさせていただきます」と言つて、押し通しましたね。そして、辞表を書いたんです。「かね

実 去 華 就 実
てから辞意を表明しておりますけれども、国家公務員法第何条並びに人事院規則何の何の趣旨にのつ
とり、速やかにご許可いただきますようお願い申し上げます」と。

華 — 珍しい辞表ですね。

去 池田 それはね、めつたに書けませんね。第何条だったかな。「書面で辞意が表明された場合には、
特別の理由がない限り、これを許可しなければならない」というのがあるんですよ。だから、大臣が
縛ろうとしたって、それは大臣の都合では駄目なんだよ、というのをバーンと突き付けたんですよ。そ
れで、「しょうがないかな」というんで許されたのが四月の十日日、二十日前だったと思えますね。
連休からずうっと地元に戻ってやっていましたから。その後の財研の記者会見で（大平さんは）「あ
いつも結局、逃げ切ったよ」とか何とかおっしゃられたそうですけれども。

— そうですか。じゃある意味じゃ大平さんが「もう少し」と言ったのを振り切って、出られたわ
けですね。

池田 そのところは、大平さんのお立場から言えば、私の政治の世界への転身を考えても、もう
少し修行を積み、また選挙区の事情ももう少しスムーズにパトントタッチができる状況をつくってとい
う、本当にそれは親心だと思つのですけど……。

— それは宏池会の会長として、増岡さんのことを配慮されたこともあったでしょうし……。

池田 それもあつたけれども、私の立場も、池田家の立場も、充分に考えられたと思います。しか
しながら、こんなものは本人が決断するしかないんでね。最終的には、それは分かっていたかもしれ
ない。

——それで五一年二月五日、三木（武夫）内閣の任期満了の選挙になるわけですね。広島三区は増岡さんが既に出ておったところに、池田さんが出られたわけですね。

池田 その当時は、自民党は現職の増岡先生、谷川和穂先生、加藤陽三先生、それに前職の中川俊思さんの四人で、他に社会党の森井忠良さんでしたが、選挙の結果は増岡先生と私で宏池会は両立できたわけですが、谷川さんと加藤さんが割を食って、中川俊思さんの女婿の中川秀直さんと森井さんが当選しました。

——その選挙で宏池会から二人出たので大平さん自身はやりにくかったと思うのですが、（池田さんに）物心両面からの応援があつたのですか。

池田 それは随分、心配していただいたのは分かっていきます。表面的にはやりにくいということ、大平先生ご自身の応援は頂戴できなかった。しかし真鍋賢二秘書が「大平の身代りです」と言つて廻つてくれました。宏池会の先生で、たびたび応援にきていただいたのは、田中六助さんだとか、登坂重次郎さん、金子岩蔵さん、金子一平さんなどですね。田中角栄先生が非常に心配して下さつて、田中派の先生方がどんどん応援にきてくれました。

——面白いものですね。まさか田中派に入つてくれということじゃないでしょうね。

池田 小沢辰男さん、安西愛子さん、若いところでは参議院議員になつたばかりだけでも亀井久興さんだとか、それから保岡興治さんもきてくれましたね。

——ちよつと話が元へ戻つて恐縮なんです、三木内閣の大蔵大臣をされている時に、福田さんが事実上、経済総理ということで采配を振つていて、大平さんは大蔵大臣ではあつたけれど、なかなか

実 思うように自分の考えを打ち出すわけにはいかない。特に物価の問題とか、ややこしいことがあつて、事あるごとに福田さんに牽制されるとか。それから酒、たばこ（値上げ）法案が流れたりして嫌な思いをしたことがあつたと思うのですが、その頃の大平さんは、大蔵大臣としてはあまり愉快でない日々だつたと思うのですが、どんな感じだつたですか。

池田 たしかにMセブンと言つたかな、経済関係閣僚会議を、経済企画庁の長官だつた福田さんが副総理を兼任して、統括するということになられたんで、大臣だけじゃなくて大蔵省としても、なかなかやりにくいことがあつたことは事実ですね。だから少なくとも経済政策全般の中でも特に財政に固有の問題については、大蔵省が全責任を持ってやって行くことであつたのに、いろいろ話があるもんですから、たしかにやりにくいことはありましたけれども……。具体的に何があつたかなどというと、あまり記憶がないですね。その当時、福田さんの秘書官は、保田（博）さんがやりました。森田（一）さんと同期の人ですから、然るべく連絡は取り合っていました。それから秘書官当時の話で言えば、椎名裁定当時の思い出もあるな。

——どつということですか。

椎名裁定をめぐる複雑な動き

池田 まず椎名裁定の前に、大平さんが総裁選に立候補するかどうかという話があつた時に、田中角栄さんのやりとりがあつて、隠密に信濃町（の池田宅）で会つたことがあるんですよ。大平さん

はうち（信濃町）だったら毎月の仏壇へのお参りだと言って、角栄さんはたしか慶応病院への誰かのお見舞いという口実にして、うちのアパートの地下の入り口からそっと入って会談をしたんですが、そこではかなり緊迫したやりとりがあつたらしいですね。それはオバアチャン（池田満枝夫人）から聞いて下さい。

それからもう一つは、宮澤（喜一）先生との関係がありましてね。当時、藤波孝生さん、河野洋平さんらの政治工学研究所の方々が、宮澤擁立論を出しておられましたね。宮澤先生は宏池会へはあまり顔を出しておられなかった状況でしたよね。平河会をやっていた。それで、いろんなことがあつて、「どうなんだ」という話があつて、ある時、院内のどっかの控室で、密かに大平・宮澤会談が行われたんです。私が秘書官で鞆を持って随って行ったのですが、「ああ、池田君ならいいや」と二人とも言われた。その時に、大平さんは「わーわー」と言う。宮澤さんのほうからは「世間ではいろいろなことが言われますけれども、私自身はそんなつもりはありません。私も宏池会の一員です。大平先生を力一杯、応援したいと思つています。人間五十代になれば、大体、自分の器量もわかつているつもりです」という台詞があつたわけです。これは、あまり知られていない話だけでも……。それで、宏池会も一丸となつて総裁選に対処できたわけですね。

——それから椎名裁定になるわけで。

池田 そんなことがあつて、椎名裁定、「青天の霹靂」の話ですが、あの当日は、秘書官としては森田さんが随いたんですけれども、実はその前日、自民党本部で四者会談をやりましたよね。それをすましてね、わざと疲れた顔をして出てこられて、そのまま真直ぐ瀬田（の私邸）に向かったのかな。

実 あれはたしか、用賀のインターをちよつと行つた頃に、大平さんが「なあー、池田君、あー俺もふる
就 さとの田舎へ帰りたいよ」とポツンと言われたのです。だから私は一靴持ちの秘書官でしたが、その
華 時は「何をおっしゃるのですか、大臣。そんなことをおっしゃつても、あなたはあなた一人の身じゃ
去 ありませんよ。それは笈を背負つて郷里を出てこられた時とは違いますよ。郷党のほうの期待もあり
ますし、政治の世界でも同志はたくさんいるんだし、また日本国全体のことを考えても、そんな讃岐
の田舎に帰りたいなんてことを口に出されるなんて、とんでもないことですよ」と、言つた憶えがあ
ります。ちよつと弱気な面がのぞいたんですね。

——それは椎名裁定の前日ですか。

池田 そうです。四者会談、六者会談のあつた日です。

——どうも自分のほうには向いてきそうもない、という感じがあつたわけですね。

池田 あるいはあつたのかも知れないな。それをポツンと言われたんです。そして、その翌日は森
田さんが随いておられて、あれ（椎名裁定）が出た時に、サーツと目白（田中角栄邸）に走つて行つ
たんだよな！。

——そんなことがあつたんですか。へー、初めて聞く話です。しかし、オトウチャン（大平さん）
にも気の弱いところがありますからね。

池田 だから、そんなに正確には憶えていないけれども、「田舎に帰りたい」というのは、「讃岐の
田舎へ帰りたいよ」という話だつたと思います。それから、要するに「あまりにも権力闘争に明け暮
れている」ということも、ちよつとおっしゃつたような気がしますね。

——（大平総理は）権力闘争の嫌いな人でしたよね。それで、池田さんは五一年にバッジを付けられるわけですね。それで、いよいよ宏池会の一年生代議士として、大平会長の下に馳せ参じるわけですね。でも、当選して挨拶に行った時は、何か言われたのですか。

池田 当選してすぐには上京しなかったのですよ。やはり初めての選挙で、しかもたいへんな混戦だったので、まず地元のお礼参りをしなくちゃいけないというので、ずうーっと宏池会に連絡しないで選挙の後始末をしていたわけです。しかし、何か宏池会のほうでは、後で聞いてみたら、「池田の奴、ひよっとしたらこっちにこないのじゃないか。そしたらたいへんだ」という話が出ていたそうです。私は、そんなことは考えてもいないんですが、逆にそう言えば、田中角栄先生に挨拶に行ったら言われましたよ。「おー、君が池田でなければ、すぐ宏池会じゃなくて俺のほうへこいと言うんだが、そういうわけには行かないよね」と。

——角さんらしいですね。

池田 それで宏池会に入りました。しかし、その後も増岡先生との関係については、大平先生にも随分ご心配をかけたと思いますよ。応援するにしても、どういつふうにバランスをとりながらやるかということ、ご苦労なさっていました。例えばオヤジ（池田元総理）の十三回忌（昭和五二年）の記念講演会を地元の呉市と竹原市の三会場で行ったんですよ。大平、宮澤両先生にお願いますと言ったら、やはり増岡先生が記念講演会といっても、選挙運動になるから、「それは困る」と言われたので、大平さんは結局、「竹原には行くけれども呉は行かない」と言われました。宮澤さんも「大平先生がそうおっしゃるのなら、私も行けない」と言うものだから、その時は佐藤信二さんと登坂重次

郎さんのお二人に呉にきてもらいました。

その時に大平先生に何できていただけなのかと聞いたら、「いや、そんなふうにはやはり増岡先生がいろいろ心配されて、スムーズに行かないというのは、お前さんがまだ政治家として修練が足らんということだよ」と言われました。私は何を言っているんだ、という感じがしましたけれどね……。

——実際に議員活動を始められたわけですが、他の人から見ると池田さんは池田総理の女婿で後継者だし、大平蔵相の秘書官で大平さんと親しいと思われたのが当然ですね。他の議員からジェラシーを感じられる状況にあったことは事実だったと思うのですが、大平さんがそれに対して何か池田さんにアドバイスされたことがありますか。

大平会長と一、二年生議員とのパイプ役に

池田 いや、そんなにこまこましましたことはなさらないけれども、強いて言えば、総裁公選を目指す動きを始めた頃だと思えますが、若い国会議員ともいろいろ交流しなければならぬということと、どうやったらいいんだろという事になった時に、私が「是非ざつくばらんな話を聞かせて下さいよ」と言つて、瀬田の大平邸の応接間へ一年生（議員）七、八名を引き連れていろいろ話をしたことがありますね。いま一緒に残っているのは原田昇左右さんだけです。大坪健一郎さんだとか、津島雄二さんもいましたね。いまは一年生議員でも平気で言いたいことをパンパン言いますけれども、あの当時は政治の世界でも長幼序がありましてね、宏池会でも一番奥の会長室に大平先生がおいでにな

つたら、そう一年生、二年生はさつと入れる雰囲気ではなかったですよ。私は、お陰様で秘書官その他で近しかったものですから、一、二年生と大平会長とのパイプ役を務めたわけです。その時、組閣について、「こういう人がいますよ」と申し上げたら、大平さんは「人事に口を出すな」とプライと横を向かれたのには参りましたね。

——そのあと総理は五五年に急逝しましたので、実際に政治家・池田行彦として政治家・大平総理と付き合われたのは、正味、四年ぐらいですか。

池田 そうですね。(私が)一年生、二年生ですから。あの時は総裁予備選挙で党員獲得を一生懸命にやりましたね。三原市の幸陽ドックなんて非常に調子のいい時でしたから、あそこだけで六千数百ぐらい党員がいましたかな。

——総理になられてから、大平さんから池田さんに官房副長官をやってくれ、というような話がありましたか。

池田 私はまだ二年生だから、そんな話はありませんよ。官房副長官は加藤(紘一)さんが二期続けましたね。鈴木善幸内閣になって、まず前半は瓦(力)先生、後半は私が官房副長官をさせていたできました。

——ところで大平総理がなくなった時、池田さんはどこにいたのですか。

池田 選挙の最中ですから、当然、選挙区にいました。それから、五四年秋の選挙は勝つつもりでやって負けて、四十日抗争になったのですが、あの選挙の時の思い出もあるなあ。一般消費税の導入を争点にやった選挙でしたが、私が呉市のあるスーパーの前の街頭演説で、なぜ一般消費税をやら

実 なければいけないかを、一生懸命に、声をからしてやっていたら、田中六助さんが応援にきてくれて、就「おい、池田君、大平さん、あれ（消費税導入）諦めたよ」と言ったのですね。発表する前日のこと華です。それで「何ですか」と私が怒った。私も若かったし、どうしても総理のおっしゃったことを去やらなければいかん、と一年懸命にやったのという思いがあったからです。

——しかし、大平総理が一般消費税をやらないかんという決心をしたのは、大蔵大臣として赤字公債の発行に踏み切ったことを、何とか均衡財政に戻そうという考えがあったからではないですか。

池田 その時の話に戻ると、あの時に財政の特例法をつくりましたよね。秘書官の私が「特例債を恒久的には言わないまでも『財政が悪化して必要があるときには発行できる』……とすべきじゃないですか」と申し上げたけれども、大平さんは「やはり健全財政というものは忘れてはいけないので、毎回毎回、汗をかいて、国会に当たって、お許しを頂戴するもんだよ」とおっしゃられた。

ところであの選挙は、一般消費税だけでなく、鉄建公団、公費天国などのスキャンダルがあり、東京ではたいへんな大雨という不運もあって、思わざる敗北を喫したわけですね。やはり後で考えてみたら、一番肝腎な政策が、選挙戦の途中で変わったというのが影響があったのじゃないかということと、鉄建公団など汚職がらみの話が影響したと思いますね。それで選挙が終わった後に、まず政治倫理の確立、公務員の綱紀の肅正に集中しようという話になったんですよ。

——池田さんにとっては、人間・大平正芳というのはどういふふうな感じの人でしたか。

ひたむきさの上に政治を築いた「哲人」

池田 非常にひたむきさを持った方だと思います。そして、人間としての在り方というものを真剣に考えて、その上に政治を築いた「哲人」と言えますね。それが、前にあげたエピソードに現われていると思います。しかしそうは言いながら、この現実政治の中で、やはり権力闘争をやり総理にまで登りつめられた方ですから、政治的人間としてのキツさもあつたと思います。それが先ほどの福田さんとの関係などにも現われていると私は思いますね。

——たしかに大平さんは権力闘争は大嫌いだったと思いますけれども、止むを得ずそういうところに立たされたということでしょうね。

池田 そのとおりです。また、政治家・大平正芳というのは、未完の政治家だったかも知れませんが、というのは、総理としてあれだけの各界の人材を集めて、政策研究会をつくって、時代が大きく変わるといふことを確実に見通しながら、それに対してどう取り組むかをいろいろ構想したわけですね。ところが、残念ながら大平内閣として、具体的にどういふ仕事をしたかという点、そこまで時間がなかったと思いますね。そういう意味では、「未完成交響曲」ということになる。だけど、ある意味じゃ、こうやって大平正芳記念財団が、いろいろ大平先生の業績を単なる顕彰ということじゃなく、大平先生の遺志に副った（環太平洋連帯構想関係の）事業を行っているのは、大平政治の発展とも言えますね。

——その意味では池田総理も、大平さん以上に、こういうものがあつていいんじゃないですかね。

実

就 池田 池田の後の政治家というのは、前尾さん、大平さん、宮澤さんにしても、池田の業績を回顧
華 するといふよりも、自分自身が政治の世界で、さらに大きな仕事をしようと、そちらのほうに関心が
去 向いてしまった、ということがあるんじゃないですか。鈴木善幸さんは少し違うかも知れませんが
ども……。

——池田さんの弟子であつたということが、皆の誇りになつていたんですね。

(平成十二年二月二三日 自民党本部総務会長室で取材)

池田行彦(いけだ・ゆきひこ) 一九三七年、広島県生まれ。六一年東大
法学部卒業と同時に大蔵省に入省。六九年粟根行彦、池田紀子と結婚、池田家
を継ぐ。七四年大平大蔵大臣秘書官、七六年衆議院議員に初当選、以後、連続
八回当選。八一年鈴木内閣の官房副長官、八六年衆院大蔵委員長、八九年宇野
内閣で総務庁長官として初入閣。九〇年党副幹長、第二次海部改造内閣の防衛
庁長官、九五年衆院予算委筆頭理事、九六年橋本内閣の外務大臣、九八年党政
務調査会長、九九年党総務会長で現在にいたる。